

オーストリア宮廷狩猟(1)

ザルツカマーグートとオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ

野 島 利 彰

ザルツカマーグート

オーストリアという国名を聞いて、私たちがもし鋭い峰々と、それを映す森に囲まれた美しい湖水と瀟洒な別荘とを思い浮かべるならば、それは古都ウィーン近郊の風景などではまったくなく、ザルツブルク南東に位置するザルツカマーグートの景色であろう。ザルツカマーグートはオーストリア中央部のオーバーエースターライヒ州南西部を中心とし、ザルツブルク州とシュタイアーマルク州の一部を含む地域の呼称である。地理的にはトラウン川の源流からグムンデンに至るまでのトラウン川の流域全部で、豊富に枝分かれする山脈から流れ落ちるすべての小川や沢を含んでいる。ここはアルプスに近く、アルプスの前縁に属する前山群とその間に大小多数の湖水が配置された美しい地域である。アルプスに接する南には氷河を蓄え、3千メートルに迫るダハシュティン山が聳え、そこから北に向かってゴーザウ湖、ハルシュタット湖、ラングバート湖、アター湖、モント湖、ヴォルフガング湖、アルター湖、トラウン湖などが大小さまざまな湖が横たわる。この自然が美しく雄大な地域はかつてハプスブルク家が愛する狩猟地であった。

ザルツカマーグートは「塩の御料地」を意味する。トラウン川上流にある小さな町ハルシュタットはハルシュタット湖の岸に立ち、世界で最も美しい湖岸の町と言われ、またケルト時代のハルシュタット遺跡として世界的に有名である。ここには岩塩鉱があり、ケルト時代(ケルト語で「ハル」が「塩」を意味する)から利用され、現在も採掘が行われている。このハルシュタットに代表されるようにザルツカマーグート一帯には岩塩層が豊富に存在し、それ故に

古くからハプスブルク家が経営した所領であった。

1273年ハプスブルク家のルドルフ1世がドイツ王に選ばれ、当時バルト海からアドリア海に達する地域を支配していたボヘミア王オトカル2世と戦い、オトカル2世が神聖ローマ帝国から奪っていたオーストリアやシュタイアーマルクを取り戻した。その後1282年にルドルフ1世は二人の息子アルブレヒトとルドルフを共同統治の形でオーストリアとシュタイアーマルク公に封じ、その地をハプスブルク家の世襲領とした。この時から同家はその豊富な岩塩の故に僻遠の地ザルツカマーグートに密接な関係を持った。当時は誰もこのトラウン川上流地域が後世その美しい風景と狩猟の故に「ハプスブルク家が最も愛好する地」となるとは夢にも考えていなかった。アルブレヒトは後に単独でこの地を支配し、ハルシュタット岩塩鉱を守るために砦を建て、塩を巡ってザルツブルク大司教と激しい戦いを行った。彼の死後、妃エリーザベトは塩のために尽力し、「ザルツカマーグートの塩採掘・製塩制度の創設者」と讃えられた。

ザルツカマーグートでは皇帝たちは君主ではなく、経営者であった。岩塩の採掘と製塩が帝室財産を支えていたので、ここでは皇帝は家長として資産を経営し、いかに利益を出すかがその最大の関心事であった。こうしてザルツカマーグートとハプスブルク家の間には何世紀にもわたって経済的に緊密な関係が続き、そこから優れた社会経済政策も生まれ、岩塩採掘労働者を守る一種の福祉政策、例えば病院の建設、や価格統制、また製塩用薪炭を維持するための森林令などが早くから存在した。

パート・イシュルと「カイザー・ヴィラ」

この地域にはまた温泉や鉱泉が湧出し、湯治場が形成された。ヨード硫黄泉が出るパート・ゴイザーン、食塩泉のパート・アウスゼーやパート・イシュルなどである。イシュルは19世紀初頭に高級保養地として有名になり、その後さらに皇帝フランツ・ヨーゼフの別邸が建てられたため夏の宮廷社交の場となり、皇帝の滞在中にはヨーロッパ国際政治の舞台ともなった。このイシュルは皇帝

フランツ・ヨーゼフにとって因縁多き町である。皇帝が誕生したのは母親のソフィー大公妃が不妊治療にイシュルを訪れたからであり、皇妃エリーザベトと出会ったのもこの町であった。

19世紀初めウィーンの有名な医師フランツ・ヴィーラーが上流階級の間食塩泉治療の効果を宣伝し、イシュルを勧めたため、イシュルは瞬間に高級保養地となった。皇帝家で最初にイシュルを訪れたのはオーストリア皇帝フランツ1世の末弟で、ベートーベンのパトロンとしても有名なオールミュツ大司教のルドルフ大公で、それは1825年のことであった。彼は食塩泉が気に入り、身体に良いと感じ、その後たびたびここに滞在した。さらにヴィーラー博士はフランツ・カール大公の妃ソフィーに食塩泉が不妊にも効果があると説いた。フランツ・カール大公はフェルディナント皇太子の弟で、皇太子・大公両夫妻とも子供がなかったため、大公妃はヴィーラー博士の言葉に飛びつき、大公夫妻は1828年に初めてイシュルの食塩泉を試した。その効果があったのか1830年8月18日にウィーン一のシェーンブルン宮殿で長男、後の皇帝フランツ・ヨーゼフが誕生した。さらに大公夫妻にはその後合計6人の子供たちが生まれ、この子どもたちは巷では「食塩泉皇子たち」と言われた。こうして新しい保養地はますますその名声を上げた。大公夫妻はその後も子供たちと夏をここで過ごした。後に大公夫妻はイシュルのトラウン河畔のゼーアウに別荘を建て、これが現在のイシュル市立博物館の建物である。フランツ・カール大公はここで夏を過ごすたびに息子たちを連れ、的撃ちや狩猟に出掛けた。1837年皇帝フェルディナント1世がここを訪れ、それに続いて大臣や芸術家がやって来た。皇帝よりもっと注目をあびた保養客は皇帝ナポレオンの妃マリア・ルイーゼであった。彼女は皇帝フェルディナント1世の姉で、すでに未亡人(ナポレオンは1821年死亡)であったが、多数の召使いや女官や宮廷料理人を連れ、一大宮廷そのままに何度か夏をここで過ごした。

1853年ソフィー大公妃の妹、バイエルンのヴィテルスバハ家のルードヴィカ大公妃がその娘ヘレーネとその妹エリーザベトを連れてイシュルを訪れた。彼女は大公妃とともにヘレーネを1848年から皇帝となったフランツ・ヨーゼフと結

婚させようとしていた。二人の若い娘が紹介されると皇帝はすぐに当時15歳であった妹に一目惚れし、皇帝はゼーアウにある別邸で行われた彼の誕生パーティーでヘレーネではなく、妹エリーザベトをダンスに誘い、それにより周囲に彼女を妃とすることを知らせた。その後すぐに婚約が行われ、イシュルの教会で婚約発表が行なわれた。母親のソフィー大公妃は若い二人の世話を使命と感じ、夏の滞在地としてイシュルに別邸を買い、それに翼部分を建て増しし、形がエリーザベトの頭文字Eとなるように改築した。それ以来皇帝はこの別邸に毎夏7、8週間滞在した。

皇帝がエリーザベト妃と出会ったのはイシュルであったが、彼女を最後に見たのもイシュルであった。エリーザベト妃はバイエルンのシュタルンベルク湖近くの自然の中に育ち、ザルツカマーグートが気に入り、始めのうちはイシュルによく滞在した。しかしウィーンの宮廷生活は彼女の育った環境とはあまりにも異なり、宮廷生活の重圧が次第に彼女の精神に影響を与えた。彼女はやがて宮廷の公式行事にも顔を見せなくなり、宮廷を逃れて皇帝とは別行動をとることが多くなった。妃はイシュルでの話し相手として皇帝にブルク劇場のスター女優シュラット夫人を紹介し、自らはイシュルからほとんど身を引いてしまった。1898年7月15日エリーザベト妃はここイシュルの別邸から旅立ち、二ヶ月後にジュネーブ湖畔で暴漢に襲われ、ヤスリで刺され殺された。

皇帝フランツ・ヨーゼフの家系には不幸がまとわりついていて、皇帝の弟マクシミリアンは1864年フランスの後押しでメキシコ皇帝となったが、1867年革命軍に捕らえられて処刑された。皇太子ルドルフは1889年ウィーン郊外のマイヤーリングの狩猟館で若い愛人と情死した。彼は皇帝と政治的に意見が合わず、よく衝突し、それが原因だったと言われている。その皇太子の跡を受けて皇位継承者となった甥のフランツ・フェルディナントはセルビア人により1914年6月28日サラエゴで暗殺された。同年7月28日、84歳の皇帝はこの「カイザー・ヴィラ」で対セルビア最後通牒を発し、それが第一次大戦の発端となった。1914年7月30日皇帝はイシュルの別邸を後にし、ウィーンに向かったが、それがイシュルとの最後の別れであり、二度と別邸に戻ることはなかった。

オーストリア宮廷狩猟(1)

現在この「カイザー・ヴィラ」は夏の間、博物館として解放されている。「カイザー・ヴィラ」の玄関を一步中に入ると、まず壁面を正方形あるいは菱形となって整然と飾る多数の黒く短い棒状の角の群に驚き、その量に圧倒される。角は20センチ前後で、形はJの文字を逆さにした形、いわゆる手鉤形で、一対の角が白い頭蓋骨ごと板に打ち付けられ、板には日付と撃った場所が記され、日付順に整理されている。これは山岳に生息するウシ科の動物シャモアの角で、そのすべてがザルツカマーグートで行われた狩猟の成果である。皇帝は別邸以外にももっと豪華な狩猟館をあちこちに持っているが、「カイザー・ヴィラ」ほど多数の狩猟の記念品が飾られている所はない。この膨大な数のシャモアの角に、アカシカや他の動物の角や剥製などを加えると、狩猟記念品の数は合計でほぼ三千点と言われる。皇帝はイシュル付近の狩猟地が好きで、皇帝家所有の多数の狩猟があるにもかかわらず、ここだけは「私の狩猟地」と呼び、「別邸」を「狩猟館」と呼んだ。しかし皇帝がこのザルツカマーグートを自分の狩猟地として頻繁に訪れるようになったのは比較的新しい。上で述べたようにフランツ・ヨーゼフは両親に連れられて毎夏ここに来ており、狩猟にも父親と行った(実際、フランツ・ヨーゼフが初めてシャモアを撃たせてもらったのは1843年9月彼が13才の時、このイシュル近くであった)。しかし素晴らしい狩猟の可能性が十分にあるにもかかわらず、彼の意識としてはザルツカマーグートは父親の狩猟地であった。そのため彼は、父親の狩猟を邪魔したくなく、また父から競争相手と見られなくなかったので、もっぱらウィーンに近いライヒェナウで狩猟をした。父フランツ・カールが老齢のため膝の痛みを訴え、輿で運ばれて狩猟地に行くようになって初めて、皇帝はザルツカマーグートで頻繁に狩猟をするようになった。

トラウンシュタイン山

夏にザルツカマーグートを列車で走ると周囲に聳える山々はみな青白く見える。これらの山は石灰岩で形成されている。実際、名前がそのものズバリの「石

灰アルプス Kalkalpen」もある。山の形は稜線がまるで鋸の歯のようにトゲトゲしいものから、緩やかな曲線を描いている形まで様々である。しかしその山頂や中腹は森林限界が低いせいも、樹木や草の被覆が少なく、薄く青みを帯びた灰色の岩盤を見せている。この地の山々にはダハシュタインとかトラウンシュタインとか「シュタイン」すなわち「石」を付けた名が多く、また「死の山」や「地獄山」と名付けられた山もある。それは緑がまったくない岩盤だけの山の姿や、生命の息吹が感じられない岩だらけの荒涼とした風景を見れば納得できる。

ウィーンからザルツブルクに向かう列車をアトナング・プフハイムでパーティシュルに向かう支線に乗り換え、途中緑多い区間を一時間も走ると、沿線が急に開けトラウン湖が現れ、列車はしばらく湖岸を走る。そしてその対岸に青白い、荒れた形の三角形の山が立ち上がっている。稜線はギザギザと頂上を目指し、斜面には多数の深い谷が刻まれている。これが標高 1691m のトラウンシュタイン山である。トラウンシュタイン山は皇帝フランツ・ヨーゼフのシャモア猟の場としてことに名高い山であった。

狩猟が行われることになれば近隣の住民は大いに関心を持ち、狩猟服姿の皇帝を一目見ようと大騒ぎになった。もちろん狩猟そのものも見物の対象になり得たが、山岳での狩猟に素人は近づけず、また危険である。しかし広い谷間の斜面や湖に面した険しい岩壁で行われる狩猟のいくつかは反対側の緩やかな傾斜地や対岸から狩猟の成り行きを見ることが出来た。トラウン湖を前に置き、大きく聳えるトラウンシュタイン山はその数少ない場所の一つであった。この山なら庶民も対岸から皇帝のシャモア猟を遠望できたのである。

『狩猟新聞』

1885年8月14日皇帝フランツ・ヨーゼフはこのトラウンシュタイン山でシャモア猟を行った。この時のシャモア猟を近代国家オーストリア帝国における宮廷狩猟の典型と見なし、今後宮廷狩猟に関するさまざまな問題を扱うに際し、

オーストリア宮廷狩猟(1)

宮廷狩猟で何が行われているかを簡単に知る一つの例として見て頂こうと思う。ところでフランツ・ヨーゼフ時代の狩猟について述べる際に、欠かすことの出来ない資料が『狩猟新聞 Jagdzeitung』である。この新聞はアルベルト・フーゴーが1858年に発刊し、1873年彼の死により“Hugo's Jagdzeitung”と改称されて続刊され、1916年皇帝の死とともに廃刊している。その意味でこの新聞は皇帝フランツ・ヨーゼフとともにあった新聞と言うことが出来る。発行者のフーゴーについてはあまり知られていず、名前も匿名らしい。宮廷で行われた狩猟に詳しいので彼は貴族出身、しかも比較的位の高い貴族であり、皇帝家関係者とコンタクトがあったと推測されている。この新聞のユニークな点は宮廷狩猟に関する記事を毎号掲載したことである。もちろん記事の大半は狩猟家(といっても貴族と富裕階級であったが)向けの一般記事と、動物学や狩猟史等に関する高度な学問的記事であった。宮廷狩猟については毎号「宮廷狩猟」と題した項目があり、いつ、どの狩猟地で、皇帝家の誰が、誰と、何を何羽・何頭撃ったかが記され、さらに必要に応じて狩猟の概要が簡単に報告されている。皇帝の狩猟の場合には「皇帝の狩猟 Allerhöchste Jagd」と別段で掲載され、時にその狩猟の推移が詳細に報じられている。『狩猟新聞』は月2回発行で、毎月1日と15日に刊行された。この『狩猟新聞』の記事に添いつつ今回の皇帝のシャモア猟がどのように行われたかを見てみよう。このシャモア猟の様子は『狩猟新聞』1885年9月15日号に狩猟家マクス・マルダウが詳細に報告している。

狩猟の準備

ザルツカマーグートは全体が皇帝の狩猟地で、2つの営林署があり、11の狩猟区に分けられていた。営林署(Forstamt)という名は林業を扱うかのように聞こえるが、実際には名称はマクシミリアン1世(在位1508-19)時代からの伝統で、営林署は狩猟動物が生息しているが故に森林を管理する役所で、つまり重点は狩猟の方にある。皇帝の狩猟地の中心をなしているのはエーベンゼー(トラウン湖の南端)営林署とその所轄の5狩猟区で、ことにオフエン湖(イシュ

ルの北東約15キロ)とラングバート湖(トラウン湖の西約5キロ)にある二つの帝室狩猟館の周辺であった。各狩猟区には多数の狩猟員が配置され、狩猟動物の数や生態を調査し、狩猟動物を保護育成し、皇帝狩猟のある場合に短時間に出来る限り満足行く成果が得られるよう日々その準備に努めた。

ザルツカマーゲートには多数の高山が含まれる。高山では狩猟に予想外のことが起こりやすい。高山地帯はもともと狩猟動物には餌探しに難しい環境である。そのため餌がなくなれば餌を求めて群が急に移動するし、また降雪によっても移動する。準備がすべて順調であっても当日が悪天候であれば狩猟の成功はおぼつかない。皇帝の狩猟日が限られているため、不測の事態は準備する側には非常に深刻な問題であった。その日数が過ぎてしまえばすべての準備が水泡に帰したからである。

皇帝の権力を以ってしても天候だけは意のままにならない。実際、『狩猟新聞』を見ると、ほとんどそれは同時に天候報告のようにさえ見える。たびたび「悪天候」や「天候の急変」が述べられている。例えば1861年9月5日オフエン湖付近で狩猟が行われた。「ここで予定していた探索猟はうち続く雨に妨げられた。しかし2頭のアカシカがいることが確認され、近くにあるトウヒ林で補助員数人が追い立てを行った。持ち場に向かう途中ですでにトゥルン・ウント・タクシス王子(バイエルの侯爵家)は発砲の機会を得て1頭を倒した。他は射手の方に追い出されなかった。夜9時に皇帝は探索猟からエーベンゼーに戻られた。翌日はトラウンシュタイン山でシャモア猟が行われる予定で、かなりの成果も期待できたが、降り続く雨と、ことに高地を覆う濃い霧と、天気回復が望めなかったため、夜のうちに中止が決められた。しかし夜に急に風が変わり、予想もしない好天となった。今からシャモア猟を実施できないので、朝にオフエン湖近くのヘレングラベンでアカシカの追い立て猟が実施された。」

また同じ年の11月16日トラウンシュタイン山でトゥルン・ウント・タクシス王子を招いて再びシャモア猟の予定であったが、その日は雪が降り、急遽、オフエン湖付近での狩猟に変更になった。翌日また狩猟が計画され、17日朝4時半に皇帝は他の狩猟客とともに日曜日のミサに参列した後直ちに狩猟地ギムバ

八へ出発した。「空は雲一つなく、満月に近い素晴らしい月が輝き、予想をはるかに上回るような成果を期待させたが、林の中を持ち場へと歩いているところから空が曇り始め、皇帝が8時半に持ち場に着かれたときには吹雪となった。濃い霧が追い立ての場に掛かり、ほとんど射手の線にまで降りた。一部の勢子が道を誤ったが、それも当然であった。従って成果も非常に乏しかった。」

1888年ドイツ皇帝ヴィルヘルム1世はわずか99日の在位で病死し、その後に即位したヴィルヘルム2世が欧州各国を歴訪した。ウィーン滞在の後、ドイツ皇帝は10月6日オーストリア皇帝の招きでミュルツシュテーク狩猟区で行われた歓迎シャモア猟に参加した。この時も悪天候で、雨と雪のためシャモア猟が中止となり、アカシカ猟だけが行われた。ドイツ皇帝は何も撃てなかった。翌日フランツ・ヨーゼフは皇妃エリーザベトにこの狩猟に関し手紙で「狩り出しの最中に嵐となった。……まもなく雪となり、非常に寒く、誰も持ち場にいることがほとんど耐えられなかった。私のヒゲと雪嵐の方に向いている顔半分は氷でガチガチになった」書き送った。悪天候の中の狩猟はとても自然を楽しむ状況ではない。ことに山は厳しい。皇帝や貴族がそうした悪天の中で耐える姿は、宮廷生活という優雅なイメージからは想像も出来ない。

狩り出し猟

トラウンシュタイン山のシャモア猟は大勢の勢子がシャモアを追い立てる狩り出し猟である。狩り出し猟が決まると営林署長ないし地区狩猟官がその実際を計画する。山岳での狩り出し猟ではまず動物を追い込み射手が待つ場所、すなわち狩猟場が選定される。これは平地の場合と異なりかなり限定される。狩猟場は岩山の間に広場状にやや開けた場所で、周囲がほとんど岩壁に囲まれ、動物がそれを越えて容易には逃げられない構造で、全体的な形は舟形である。狩り出しの方向を決めるには風の方向や太陽の位置も考慮される。射手が太陽の方に向いては銃を使いにくい。狩猟場には射撃台が互いに離れて設けられ、射手である参加者が一人ずつ入る。射撃台の位置は動物に目立たぬよう背後が

暗い場所が選ばれる。さらに射手の身を隠すため三方を胸の高さほどの柴垣で囲い、中に簡単な木製のベンチを置く。動物の逃げ道に当る最初の、一番良い台に皇帝が入り、以下、身分の順に持ち場が決まる。

山岳での狩り出し猟にはかなりの人数の勢子が必要で、営林署長が一番苦労するのはこの人数集めである。しかも勢子はまったくの素人では役に立たず、狩り出しという仕事をある程度理解し、山をよく知っていなければならない。尾根筋には所々に越えることの出来ない深い裂け目があり、また険しい道が枝分かれする迷いやすい場所がある。従って追い立てを立案するにはまず勢子がそれぞれの持ち場にたどり着けるか否か、次に狩猟動物が通い慣れている逃げ道が付近にあるか否かが考慮される。動物は普通、通いなれた道を逃げて行くので、勢子は狩猟場へと通じる道へと動物を追い立てて行く。山岳は勢子や狩猟員の行動には非常な困難を伴うので、土地の山に慣れた、動物の通い道に詳しい地元ガイドを雇い、勢子の安全を確保し、連携作業が行えるようにする。人員の手配をした後、営林署長は狩猟が行われる山を閉鎖する。勢子が入る以前に人が山に入ると、動物が何かに驚いて移動する恐れがあるからである。

勢子の仕事はヨーゼフ 2 世による農民解放 (1793 年) 以前は賦役労働で行われ、無報酬であったが、それ以降は手当が支払われるようになった。

招待状

管轄営林署に狩猟の開催が通知され、営林署がその準備を整えると、宮廷から参加者に招待状が送られる。招待状の表書きは Allerhöchste Einladung、「いと貴(たか)き招待状」、つまり「皇帝招待状」と書かれてあり、狩猟の場所、集合場所、出発時間、朝食(場合によっては昼食や夕食)の場所と時間、狩猟開始時間、狩猟所要時間、帰着時間、銃搬入時間(銃その他を積み込むために前もって預ける時間)が記されている。時間は数字で示されているが、ドイツ語での時間の言い方に従い、 $1/2$ 4 と分数を前にしてある。つまりハルブ(半 = 2 分の 1) フィーア(4 時)である(ドイツ語ではこれで 3 時半)。1912 年 8

オーストリア宮廷狩猟(1)

月26日の招待状では以下のようにになっている。書式が出来ており、太字部分は印刷されており、下線部分に記入する仕組みになっている。不必要な部分は線で消されている。

| 皇帝招待状 | |
|-----------------------------|--------------------------|
| アカシカ・シャモア猟 | 1912年8月26日 場所 <u>タール</u> |
| 朝食 水泳学校にて | 時間 <u>朝3時15分まで</u> |
| 昼食 } <u>別邸にて</u> | |
| 夕食 } | |
| 出発 列車で | <u>3時半</u> |
| 馬車で | |
| 狩り出しの開始 | <u>朝6時</u> |
| 狩り出し所要時間 | <u>2時間半</u> |
| イシュル帰着 | 約 <u>午前10時</u> |
| 銃搬入時間 | 守衛室 <u>25日夕方まで</u> |

宮廷狩猟ではさらに簡単な予定時間表が作られ参加者に配布される。ウィーンの南西に約70キロほどのところに標高1903mのシュネーアルペ山がある。この付近も皇帝の狩猟地であった。ウィーン南駅からグラーツ方面に向かう列車で約1時間ほど走り、そこからさらにミュルツ川の谷を20キロほど遡ったところがシュネーアルペ山の山麓の町ミュルツシュテークである。ここで行われた狩猟の予定表は

「陛下は招待客の方々とともに1月11日朝5時半特別列車で南駅をミュルツシュテークに向けて出発されます。お供をされる貴顕の方々はその時

間に南駅で陛下の到着をお待ち下さい。列車でノイベルクへ行き、そこからさらに橋でミュルツシュテークへ向かいます。ミュルツシュテーク到着は10時ころの予定です。狩猟身支度の後、簡単な朝食を摂り、11時半に狩猟に出発します。従って狩猟身支度に必要な諸道具を運ぶ御従者には、狩猟のプログラムが時間通りに行われますよう、出来る限り早く支度準備を済ませる旨お伝え下さい。帰りは13日夕方5時半または6時ミュルツツシューラク駅発の予定で、ウィーン到着は8時半ないし9時の予定です」

参加者

ミュルツシュテークのようなウィーン近郊の狩猟地や、ウィーンと目と鼻の先にあり、面積が2400haもあるラインツ狩猟園(現在でも一部はイノシシやアカシカのいる狩猟場)などでは賓客を招いて外交的な行事として狩猟が行われたが、ザルツカマーグートの狩猟は皇帝の年令とともに私的な色彩が濃くなった。それはイシュルの滞在がすでに皇帝にとって休暇の意味合いが強かったからである。そのため狩猟客もほとんど身内であった。今回(1885年8月14日)のトラウンシュタイン山のシャモア猟参加者は12名で、バイエルン王子レオポルト、旧トスカナ大公国の王レオポルト4世、その二人の息子フランツ・サルヴァートルと息子カール・サルヴァートル、そのほか各人の侍従武官であった。レオポルト4世もハプスブルク家の出身である。トスカナ大公国は1860年にサルジニアに併合されて消滅し、大公レオポルト2世はその直前にウィーンに逃れ、息子のレオポルト4世に譲位して亡くなった。4世はそれ以来ウィーンで亡命生活を送っていた。その息子のフランツ・サルヴァートルは皇帝の末娘ヴァレリー皇女の婿である。

バイエルン王子は皇帝の次女ギーゼラ皇女の婿で、優れた社交家で、教養があり、話題も豊富で、宮廷の皆から愛された。しかしフランツ・ヨーゼフにことに気に入られたのは彼が同時に勇敢な軍人であることであった。王子は1870年のプロイセン・フランス戦争(南ドイツ軍も参加)中、砲弾の破片で足を負

オーストリア宮廷狩猟(1)

傷していたにもかかわらず勇敢に戦い、ついにフランス軍を敗退させたという経歴の持ち主であった。彼はその後も軍人としての道を歩み、第一次大戦中の1915年に陸軍元帥となり、東部戦線を指揮し、1918年3月総司令官としてソ連政府との和平条約に調印した。

他方、皇帝自身も軍隊が好きで、13才で龍騎兵連隊長となり、それ以降、書類の署名には皇子の署名ではなく、当然のように「大佐」の肩書きを使うほどであった。皇帝となっても軍人で、公式の席でもほとんど軍服で現れた。軍人皇帝がバイエルン王子を無二の狩猟の友としたのは当然のことであった。従って王子が8月にイシュルに息子たちを連れてやってくると、ほとんど連日狩猟が行われることになった。

シャモア

今回の狩猟目的はシャモアである。シャモア Gamswild (*Rupicapra rupicapra*) は山岳に生息するウシ科の動物で、ヤギに似ている。ヨーロッパではアルプスやピレネーが生息地で、高山の草地や、森林限界下部の岩場の多い樹林に好んで生息している。体長や体高もほぼヤギ並みである。夏は茶色、秋冬は黒みがかった毛をしている。正面から見ると顔に目を縦に通る黒い線が二本あり、歌舞伎役者のように見える。餌はイネ科植物、草類、イチゴ類、キノコ、コケなどで、さらに樹木の葉や若芽などである。角は雌雄にあり、抜け落ちずに毎年成長する。先端は鋭く、Jの字のように後方に湾曲している。ひづめは硬く、しかも適度に湿り、滑り止めとなり、岩場を走り回るのに適している。また肢のパネが強く、高山の岩場を大胆に跳躍して逃げる。ザルツカマーゲート一帯の山岳には現在でも二千頭前後生息している。シャモアは勢子に追われると前へ前へと逃げる(アカシカはこれに対し横に逃げ、機会があれば勢子の後ろへ回り込もうとする)。

シャモアの追い立て

狩り出しは狩猟の当日行われるが、実際には勢子はその前日、あるいは数日前から少しずつ狩猟動物を追い集め、最後に一齐に狩猟場に向けて追い立てる。この準備段階からトラウンシュタイン山ではもう湖岸からの見物が可能である。まず勢子たちやそれを指導する狩猟員たちが峡谷を通り、登ることも不可能と思えるような垂直にそそり立つ岩壁を登って行き、岩壁を狩猟場の方向へシャモアを追い立てて行く。勢子もまたシャモアのように俊敏である。堅い岩壁が急に賑やかになる。勢子は歓声を上げ、歌を歌いながら、一列になって前進して行き、シャモアを樹木の生える隠れ場から追い出す。時々、シャモアを怖がらせるために銃が発射され、その銃声は下にいる見物人の所まで聞こえてくる。下からはシャモアが一頭ずつバラバラに、あるいは群となって岩山の稜線を渡って行くのが見える。

やがて日が傾き、岩壁のあたりが次第に静かになり、夜が始まる。突然、山頂付近に大きな火が燃え上がり、それに加えて小さな火がだんだんと増え、多数の火となり、一列に伸びて行く。このようにして勢子たちは追い出されたシャモアを一晩中見張り、シャモアが夜陰に乗じて前の隠れ場に戻るのを防ぐ。暗黒の山に赤く燃える火は対岸から見上げる者にとっては美しく、輝く星のようであるが、山で一夜を明かす狩猟員や勢子にとっては厳しい。山の天候は激変する。彼らは晴雨や寒暖にかかわらずこの危険な場所に明日行われる狩猟まで、そのまま動かないよう命じられている。この時も雨が相当に降った。夕方6時から午前1時まで滝のように降り、誰もが狩猟はほとんど出来ないだろうと思った。しかし雨は午前1時に突然止み、その代わり今度はかなり強い風が吹き出した。勢子たちは山上でこの豪雨にさらされ、強風に耐えている。

特別列車

今回のシャモア狩では皇帝と狩猟客たちは西鉄道で午後4時にウィーンを出

オーストリア宮廷狩猟(1)

発した。皇帝が列車を利用する場合には特別列車、いわゆるお召し列車が編成される。特別列車は料理車、皇帝車(皇妃が同行する場合には皇妃車も連結)、随行者用車両(8人用)からなり、これに必要なに応じて12人乗りサロン車が数両付けられる。宮廷職員用には一等車が連結される。随行者と狩猟客はたいてい25人から40人で、家政の関係者は約10人である。参加者には狩猟の場合のみならず、車中でも食事が支給される。そのため比較的短い走行時間の間に料理を仕上げる事が出来るよう、肉料理とスープとは前もって準備される。早期出発する場合には列車が走り出すと皇帝と随行者ないし狩猟客に朝食が提供される。

ウィーンを4時に出た列車は真夜中にトラウン湖北端の町グムンデンに到着し、そこから蒸気船で1時間ほど湖を走った。狩猟参加者を乗せた船は午前1時半に湖の南端にあるエーベンゼーに入港した。上陸するとレストランの郵便亭で休息をし、狩猟に備えて「軽い朝食(Gabelfrühstück)」を摂った。「軽い朝食」といってもスープに、付け合わせのある暖かい肉料理、またはソース付きの冷たい肉料理である。

狩猟服

この狩猟では参加者はウィーンを発つ時からすでに狩猟服であったろう。狩猟服はある程度正式な服装と認められ、現在でも晴れ着として祭礼に見かけることが多い。フランスのルイ王朝の時代には追走猟が盛んであった。追走猟ではすべてが華麗であった。参加者と狩猟員は赤やブルーを主体とし、金の縁取りのある衣装を身に着け、また追う猟犬の群も色や容姿の美しいものが揃えられ、さらに待機する貴族や貴婦人たちの乗る馬車も優美で、すべてが華麗であった。オーストリアやドイツでもその華麗さのまま伝えられ、行われた。しかしフランス革命後は華麗な狩猟はまれになり、追走猟はやがて探索猟や待ち猟に替わった。それに伴い狩猟服も大きく変化し、派手な色ではなく緑や灰色を主体とした目立たない色が用いられるようになった。その点で庶民の服装と

あまり違いがなくなった。

ウィーンでは皇帝は日常的に軍服を着用していたが、イシュルでは狩猟服姿でよく現れた。そのためイシュルの宮廷では狩猟服も礼装と見なされた。皇帝の典型的な狩猟服姿とはまず膝上までしかない革製の半ズボンである。これは吊りズボン式でシャモア革製で、ひどく擦り切れていた。一般的に狩猟服用半ズボンの革はアカシカがシャモアでなければならず、牛や馬の革は正式とは見なされなかった。革ズボンはしかも新品ではなく使い古されていることが尊ばれた。シャツはフランネル製で、模様は藤色と白のチェック柄、上着は灰色のフェルト製で、衿の折り返しが緑色で、同じ色の飾り紐が付いている。ネクタイは赤い。上着のボタンはアカシカの角から作られている。靴下は膝下までの長靴下で、膝が裸で現れている。狩猟服ではこの「膝が出ている (kniefrei)」ことが正式であった。靴は山靴で、裏に十分に鉄が打ってある。帽子には「シャモアの髭 Gamsbart」が、クロライチョウの飾り尾が飾られている。「髭」と呼ばれるが実際にはシャモアの背筋の毛で、長い毛が量的に少ないため飾りになるまでにはかなりの頭数が必要である。持ち物の中で狩猟家にとって最も重要な銃は有名なイシュラー銃で、銃身が短く、単身銃で、単発式であった。そして中世のギルドに属する狩猟員のように皇帝は鍔のあるアカシカ猟刀をベルトに差し、さらに角笛を腰に下げることもあった。そのほか、金剛杖のような身長を超える真っ直ぐな木製の杖を持っていた。杖の下端には尖った金属がはめられている。そして狩猟家の必需品であるリュックを背負った。これが狩猟家の伝統的な姿であり、現在のオーストリアやバイエルンの狩猟家もあまり違わない。

他の参加者も似たような服装で、この狩猟服姿ではよく山で見かける狩猟員と小奇麗な点が異なっているだけで、それ以外の違いは余りなかった。皇帝は狩猟員や勢力たちと一緒に歩いているとまったく目立たず、また彼らと気軽に言葉も交わした。実際、皇帝が狩猟員と間違われた話が伝わっている。ある時、山で道に迷い皇帝は農民にイシュルへの道を尋ね、別れ際に身分を明かし、「私はオーストリア皇帝で、こちらがザクセン王とトスカナ大公だ」と言うと、農

オーストリア宮廷狩猟(1)

民は大笑いし、「そんなことは誰でも言えるさ」と言いながら去って行った。翌日この農民に別な人がそれが本当であったと伝え、農民は「あの服装で！」と絶句し、「だってチップもくれなかったぜ」と付け加えた。なおここに登場するザクセン王とは1873年に即位したアルベルト1世(1828 - 1902)であろう。1854年に王位に就いたその父ヨハン1世(1801 - 1873)では皇帝とは30才も年令が離れ、高齢すぎるからである。

シャモア猟

この狩猟の報告者である狩猟家マクス・マルダウは湖のこちら側で狩猟の様子を見物することが出来る唯一の場所に宿を取っておいた。対岸には押し寄せる見物客に対し厳しい規制措置が狩猟を指揮する林務長から出されており、報道関係者ですらアイゼナウ村に設置された検問所を抜け、現場付近まで行くことが難しくなったからであった。狩猟家マルダウは夜も明けぬうち一層よく見える場所に行くため、真っ暗闇の中を小船で湖を移動し、アイゼナウ村に一番近い対岸に到着した。そこからガイドの案内で1時間ほどのかなり急な道を登り、アイゼナウ村越しに狩猟が見物できる観察地点へ到達した。

4時に馬車の列が狩猟場へ向かって走り出した。見物客にはその灯りが一列になって山を登って行く様子が見られた。馬車は登山地点まで登り、ここで下車し小休止する。それから静かにそれぞれの持ち場に向かって徒歩でジグザクの登山道を登り始めた。夜はもうすっかり明け、双眼鏡を使えば参加者一人一人が判別できた。持ち場を示すために先頭を林務長が行き、そのすぐ後ろに皇帝、ルドルフ皇太子、バイエルン王子、トスカナ大公がその他の狩猟客とともに続いた。さらにお付き狩猟官や運搬人が続いた。狩猟場はかなり急斜面の谷にあり、それほど高くないギザギザの岩の壁に面し、その下はいわゆるガレ場になっている。追われたシャモアはこの岩の壁を越えて射手の待ちかまえる広場に出てこざるを得ない。持ち場はたいてい突き出した岩壁の後ろに見えないように置かれている。すでに落ち着かない様子でシャモアが数頭鋭い岩山の端を

行ったり来たりしているのが見え、その姿が朝焼けの赤い空を背景にシルエットのように浮き立っていた。夜中に激しく降った雨のため峡谷に形成された濃い霧が峰々を取り巻いていたが、明るくなるに従って強くなって来た風が展望を妨げる霧を引き裂き、吹き飛ばしてくれた。

雷鳴のような轟音が響き、その音は巨大な岩壁にこだまし、ゴロゴロと谷から谷へ渡って行った。すぐに二度目の音が続いた。これは「追い立て開始」を合図する銃声であった。これに応じて「了解」意味する銃声が鳴り響き、勢子たちの歓声が挙がった。狩り出しの開始は一番高い位置にある射撃台に射手（普通は皇帝）が入ったのを確認してからである。天気はかなり晴れ上がり、風は谷に向かって吹いていた。追われて不安になったシャモアは再び岩角に姿を現し、非常に用心しながら高台を離れ、次第に射撃地点へと近づいていった。銃声が響き渡ったり、銃声が耳に届くずっと前に、シャモアが数頭落ちるのが見え、数頭が弾を受けて跳ね上がった。

今回の狩猟ではいつもと異なり一番高い位置にある最良の持ち場を皇帝が譲り、そこに皇太子が入った。第二の持ち場はバイエルン王子で、皇帝は第三の持ち場にいた。皇太子のいる第一の持ち場の下に急激に落ち込む壁があり、ここを越えて多数のシャモアが移動して行く。シャモアが射撃地点に入るや否や、発砲が開始された。皇帝は射撃の際には決して垣や岩を銃の支えとせず、立ったまま支えなしで銃を構えて撃つ。シャモアはウサギのように転がり、壁から下にあるガレ場に落ちた。次から次へと銃声が鳴り響いた。倒れているシャモアが見えた。時々、銃声の間が空くが、長く続かず、再び多数のシャモアの群が勢子に追われてやって来る。あちこちの岩の頂にすでに勢子の追い立て線を指示する狩猟員の姿が見えて来た。次第に勢子たちが近づき、歓声を上げながら、歌いながら、ひどく陽気に非常に危険なシャモアの通り道をよじ登り、シャモアをその隠れ場から追い立てた。利口なシャモアは頂から頂へと跳び、安全で、人間が決して後を追えない場所を探して逃げた。シャモアは岩の出っ張りや、ほんの小さな岩の張り出しにも鋭い足先を掛け、跳ねるように斜面を登って行った。

オーストリア宮廷狩猟(1)

狩猟員と勢子たちが今射撃方向の延長線にある岩壁の頂にたどり着いた。銃声が静かになり、時折、手負いや逃げ場を失ったシャモアに対するトドメの銃声が聞こえた。獲物を運び、手負いを追うようにとの、射手が狩猟員と勢子たちへ呼び掛ける声ははっきりと聞こえた。射手はそれぞれに決められた色(皇帝は緑色)のリボンを持っていて、それを自分が倒したシャモアの角に結ぶ。このため時には隣り合う射手が同じ獲物を自分が撃ったとして言い争いになることも起きる。このような場合には皇帝の任命した審判が銃弾の入射口ならびに出射口を調べ、撃たれた状況を確認し、最後に命中させた射手を決定し、モミまたはアルプスマツの枝を慣習に従って入射口の血に浸し、命中者に対する栄誉の枝印として射手に授ける。

獲物の検分

狩猟が終わり下山が始まる。あらゆる側から、あらゆる峡谷から、勢子たちが獲物のシャモアを背負って降りてくる。普段は荒涼とした岩だらけの岩壁に活気と動きが満ちる。すべてが下へ下へと向かって来る。勢子たちは獲物を「獲物の検分 Strecke」の場まで運ぶ。「検分」の場には庶民も立ち入りが許されている。狩り出し猟が行われると狩猟家の習わしとして必ず「獲物の検分」と呼ばれる儀式が行われる。緑の葉の付いた枝(モミやトウヒなどの針葉樹か、広葉樹のナラが普通)で地面と周囲を飾り、獲物を並べ、各々の獲物の数が報告され、その後、「～の死」という各動物に応じたホルン曲が狩猟員により演奏され、最後に「ハラリ(狩猟は終わった)」の曲が奏される。普通、動物は種類ごとにアカシカを先頭に高狩猟動物から順に並べるが、ザルツカマーゲートの狩猟では参加者の身分ごとに並べる。

皇帝は狩猟客と狩猟員、勢子たちの中央に立ち、狩猟の獲物を一つ一つ観察し、細かな点について狩猟員からの報告を受けた。検分場は人波でごった返し、後から後からシャモアが運び込まれた。ある時、獲物の検分の際に押し寄せる人混みの中に、皇帝は人々の股の下を潜って無理矢理前に出ようとする5才ほ

どの男の子を見つけ、その子を掴み挙げ、驚いて後ずさりした群衆に向かって「この小さなシュタイアーマルク人を踏み潰さないでくれ」と叫んだと言う。検分の後、狩猟員の手で内臓の抜き取りが行われ、頭が切り取られた。これは角を狩猟の主催者である皇帝が記念品として各狩猟客にプレゼントするためである。今回の狩猟では記録によると160発が発射され、シャモア54頭が撃たれた。そのうち皇帝は8頭、皇太子が16頭、バイエルン王子が12頭であった。皇太子が撃ったシャモアの中に白いシャモアがいた。皇帝は今日の狩猟の指揮官である林務長に、狩猟の結果ならびに遺漏のない狩り出し猟について満足であるとの言葉を掛けた。その後、皇帝は狩猟客たちとトラウン湖岸へ向かい、棧橋の蒸気船に食事のため乗船した。この蒸気船の周りを賑やかに旗を飾った小舟やゴンドラが走り回った。

以上がトラウンシュタインで行われたシャモア猟である。(以下次号)

(02年5月13日)

参考文献

- Hugo, Albert(hrg.):Jagd=Zeitung
Prossinagg, Hermann: Österreichs Jagd im 20. Jahrhundert. Österreichischer Jagd- und Fischerei-Verlag. Wien, 1999
Gergely, Thomas u. Gabriele / Prossinagg, Hermann: Vom Saugarten des Kaisers zum Tiergarten der Wiener. Böhlau Verlag, Wien Köln Weimar, 1993
Nussbaum, Johann: 2000 Jahre Jagd in Österreich. Österreichischer Jagd- und Fischerei-Verlag. Wien,2000
Reifenscheid, Richard: Die Habsburger in Lebensbildern. Verlag Styria, Graz Wien Köln, 1990
Martin, Rüdiger und Günther: In den Jagdrevieren auf den Spuren der Habsburger. Edition S, Wien, 1994
Fürlinger, Herbert St.(hrg.):Jagd in Österreich. Verlag Fürlinger, Wien München Zurich, 1964
Katalog von der 209. Sonderausstellung des Historischen Museum der Stadt Wien: Jagdzeit, Österreichsjagdgeschichte - eine Pirsch - . 1997